

## 大地に頭を下げて念仏申せ

雨後のたけのこのように

如何に宗教の自由とはいえ、雨後の筍のように迷信邪教が天下に、大手ひろげてはびこっている。日本の大衆を宗教の面から見た時、まことに寒心に堪えぬものがある。しかしこの亡国の相も、文化の低き加減を現わしているのでどうすることも出来ぬ。

## 悪逆無道

土蔵破りの賊が衣類を皆盗んで行った、しかし「盗人を捕らえて見れば我が子なり」保有米を知らぬ間に全部持ち出して女につき、親の衣類を一枚残さず流してしまつて、家を出たまま帰らぬ息子もいる。ものを盗まれる位はまだいい、油断すれば、何時首をかかれるかわからない。サルトルの実存主義をはき違えて、子供を妻にたたきつけて、しゃあしゃあと恋人と行き、いわくこれが新しい倫理。

悪逆無道一世を風靡するのも、これをどうすることも出来ない。亡国の山野をながめて、大和民族とはこれほど情ない民族であつたのであるか、と歎息するのは、我国の人皆であろう。

## 真宗念仏

国家の権力で治められていたものが、言いかえると外からの力で規制されていたものが、急に外からの力で圧迫されない、いわゆる自由の天地に投げ出されたのである。主権在民と、国家の主権も我等の手にある。家には戸主が無くなった。何を言おうと、何を信じようと、何を行おうと勝手である。それはしかし人間の非常な幸福であり進歩であつた。

しかし、かくの如く、外からの一切の規制が取除かれたということは、外からの束縛や桎梏のかわりに、内的自覚、内からの人格的統一の力によつて、内からの倫理的規範、乃至宗教的自覚によつて生きよ、ということではないか、でないならば虎狼を街に放つたような混乱がおこるのは当然である。さうして今は全くその恐るべき相なのである。

恐るべき何もものも持たない。唯あるものは動物本能、五欲の享樂、世は滔々として無明の濁流に流されてゆく。

然るに眼を一転すれば、今、現に、真宗念仏があつてこの中に光っている。これは又何という有難いことであらう。真宗念仏の如きは、何も知らない田舎のぢば、のものの位にしか考へられなかつたものが、漸くにして青年のものとなり、インテリのものとなつて、聖人の信の自覚は凡そ人類自覚史上最深のものであり、民族文化史上の富士の山であることがわかつて来たのは嬉しいことである。

終戦後、真宗にコビリついた封建性の垢は自ら落され、純正なる本願の宗教、浄土真宗の相が、大衆の心に生きはじめたことは嬉しいことである。

真宗念仏の生命であるところの他力本願、この聖語ほど間違えられているものは

ない。然し今はこれを取上げている暇はないが、然し、他力本願とは金剛の真心を獲得することである。相対有限なる罪の子が、正しい生き方を求めて求めきつた最後に、悩みと罪業とを背負って、罪悪の自覚を踏台として、無限絶対なる仏の大慈悲真実の中に飛躍し、摂取せられて、善悪を超え、自己を超えて至上善に生かされ、かえって人生の現実無限に随順して、金剛の真心を生きる。

これは決して相対の他力ではない。絶対他力である。有限者と有限者との間の交渉ではなくて、有限と無限との交渉である。依頼心の増長ではなくて、独立の宣言である。内と外との何ものにも動かされず、自由なる選択における最後の決断である。人間としての私の主体性の根本的な確立である。これは又人間性の一切を照破しつつしての信の自覚、動物的本能、倫理的自我を貫いての宗教的自覚である。これを悪人正機の世界といい、本願の宗教といい、真宗念仏というのである。

我等は、この濁悪乱動の世に、独り真宗念仏があつて、外の一切の規範を取除かれてもますますこの真宗念仏によつて人格の内面的統一、人格の自主性発揮の機会が訪れたことを喜ぶのである。

たとひ一時の混乱があらうとも、外的な圧迫は取去られねばならぬ。そして真の内面的統一によつて生き得る宗教的、人格的自覚を成就しなければならぬ。

およそ世に不正がはびこり、逆悪不善が行じられるのを見たならば、これを悲憤慷慨せぬ者はないであらう。

それは人間が倫理的なものであり、社会的な存在である限り、誠に当然なことである。特に民主主義的に開放された社会では、不正は正されねばならぬ、社会悪の根源は容赦なく取除かれねばならぬ。然し、その倫理的善悪の裁きだけで私の問題は解決されるであらうか。善悪の裁きをしている自己そのもの、それを柵の上において、独り清しとする、その独善的な態度の中核にひそむ自我の妄執、この我執こそ人類を毒する最大の敵ではないか。高く自らとまり、火になつて憤っているまゝが、社会を暗くし、家庭を陰惨にし、人を虐げて権力的となる。であるから、唯の悲憤慷慨からは、ほんとうのものは生れない。まして人間には、ものの判断に私情を入れ、また身に寸徳なくして他を裁き得るが故に、その善悪の心の上に更に鋭い光を受け取らねばならない。

ここに親鸞聖人の念仏の世界がある。

歎異抄にいはいはく「まことに如来の御恩といふことをば沙汰なくして我も人も善悪といふことをのみ申しあへり。聖人の仰せには、善悪の二つ総じてもて存知せざるなり。その故は、如来の御心に善しと思召すほどに知り徹したらばこそ善きを知りたるにてもあらめ、如来の悪しと思召す程に知り徹したらばこそ悪しさを知りたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は万の事みなもてそらごとたわごと真実あることなきに、たゞ念仏のみぞまことに在しますとこそ仰せは候ひしか……」と。

煩惱具足の凡夫が善と云つても間違つている。悪と見ても間違つている。それであるのに我々は、朝から晩まで善悪ばかり言つている。人間の理性は曇つている。

如来の智慧光に照されて、善悪の心の底にひそむ我執が絶対否定されぬ限り、念仏のみぞまことに在しますとはわからない。

「よしあしの文字をもしらすぬひとはみな、まことのこころなりけるを、

善悪の字しりがほにおおそらごとのかたちなり。

是非しらず邪正もわかぬこの身なり、

小慈小悲もなければども 名利に人師をこのむなり」（和讃）

とは聖人の血涙をしぼつての悲歎であり懺悔である。

念仏をぬきにしてのいたずらなる悲憤慷慨が、如何に悲惨なる高上りであるか知るべきである。五濁の中に真実なる我を発見し、五体投地して念仏すべきである。

一切は念仏のたね

一度念仏の身となり、又多くの同行善知識を見出し、御念仏の尊いことが具体的にわかつて来ると、一切の人は、念仏の尊さを表から正顕するか、裏から反顕するか、いづれにしても念仏道を顕示していることがわかる。かつては一家の中が修羅道の如く、互に呪ひのろわれて、無明の闇の中に裁きあい、傷つけあっていたものが、一人念仏し二人念仏している間に、一家全員念仏になって、今は親子夫婦兄弟が皆とけあい、夕食後にはなごやかな空気の中で御法御讃嘆の花が咲く、こうした事実は今具体的に拝まされている。この一家の以前の相は「念仏のない正法の生きたまはぬ世界は、この通り」と念仏の尊いことを反顕し、今のこの家庭は、直ちに念仏の尊さを正顕しているのである。念仏の子にとっては一切は念仏のたねである。

命がけで正法を聞け

世にも尊きものは如来の实在を身を以て証明する人である。この人を觀経には、分陀利華と大白蓮華に喩え、善導大師は、希有人最勝人妙好人上人上人、真の仏弟子であると讃えられた。

比の念仏道の立証者は如何にして生れるのであるか、いうまでもなく、不退に精進して聞其名号信心歡喜と正法を真剣に聞きぬいた人である。唯、御法を聞くこと「たとひ三千大千世界にみたらん火をもすぎゆきて仏のみ名」を聞いた人である。妙好人たちの過去にはまことに血のにじむ精進があつた。聞くこと求めること信じられるまで求めること、絶対他力がわかるまで精進すること、自分の手柄にしたい間は、道がまだ得られない証拠、身についたら御恩だけが残る。聞くこと求めること信ずること、それは衆生の領域である。これを十八願界という。道を得、念仏を称えてその先がどうなるか、それは仏の領域、私の知ったことではない。これが即ち仏の十一願の世界である。

それをあべこべに、結果から割り出して、「極楽参りをするには」と手を出して「信心の因がある」と功利的になつたら、因果顛倒しているから、自力の雲が晴れぬから、仏の光の邪魔をするから、一生寺参りしたとて、念仏の光を正顕する人にはなれない。せいぜい仏法の物知りが出来る位である。しかし、こうして人は一生聞いたやうでも、命がけの精進はない。従つて、心の奥底の疑はとれない。若存若亡

で、聞いて涙のこぼれた時だけのことで一生をおわる。

同じ聞くなら、「それほど時間と金とを使って出て行かいても信は得られる」等、悪魔悪知識の声を断乎しりぞけて、聞いて聞いて聞きぬけ。

近い内に日は暮れる。

人間は何のために生まれたのか。人より教えを引けば禽獸、禽獸よりも浅ましい。故に、大聖言わく「大命將に終らんとして悔懼けくこも交ま至こる」と。

善人も悪人も、男も女も、老いも若きも、唯、命をかけて正法を聞け。しかして、頭を下げて念仏申せ。

苦もまた結構

五濁悪世とは、大聖のかねて説きをきたもうたところである。今さら驚くには当たらない。大臣でも博士でも百姓でも商人でも皆同じ大地の上の人間である。念仏が無ければ、何たる様でも現わして来る。それらを見て裁き悲憤することなら誰でも出来る。

濁世の時に生れたものは、時が悪ければ、その中に住むものの機も亦悪い。故に道綽は、時を末法濁世と決し、機を一生造悪と定められた。この五濁を内に凝視内觀して、悪人凡夫と深信し、闇の深さはそのま光の深さであり、煩惱無底なるが故に大悲無底を知る。闇無限なるが故に光も亦無限。罪業の重きにつけて願力の重きを知り、生死大海の波高きが故に弘誓大船の金剛不壞を知る。それが即ち如来廻向の智慧である。

かくして智慧の念仏は、如何に内と外とに五濁の闇が深からうとも、それには障へられず、否、却つて罪悪生死の苦悩が深ければ深いだけ、いよいよ明かに信証せられるものである。若し倫理だけであり、又倫理的宗教即ち聖道門的であるならば、又しても又しても煩惱の波に洗い流されて、金剛の信心に住することは出来ないであらう。

平和な時には何も生れない。国乱れ、天災地変おこり、苦悩多き日に真実なる人は生れる。苦悩に泣く日、その本人にとつては、何が何やらわからず、無意味なる苦に、無価値な悩みに我一人泣く気がするであらう。しかし、その人こそ、今、自己の真相に、人間本来の赤裸々な姿に立返つているのである。種類の如何を問わず、苦悩は人を本来の姿に近づける。我は「死への存在」である。然るに健康のために、世のものにまぎれるが故、自己自身を忘れて生きることを、キエルケゴールは放心と云ひ、ハイデッガーは頽廢（くづれすたれる）と言つた。しかも我らは、この放心や頽廢という自己を失つた相を「幸福」と名づけている。幸福とは哀れなる無自覚のことである。

人間が死を思ふ時、最大不安がおとづれる。それは一切の無を知るからだ。苦悩にあう、自己の無価値と無力を知る。しかもそれが我の本来の姿なのである。我々は浮かれ浮かれて、死を忘れ、無価値を忘れて生きている。自ら強者を以て任じ、智者を誇り、威勢を行じているが如きは実に、乱心、放心、頽廢、無道沙汰の限りである。終戦前のあの意気揚々たる高上りは今にしてお恥しい限りではなかつたか。

五濁悪世の重なりおこる苦悩が、我を我本来の相によびさまして、不安、動揺、憂慮、恐怖の生死海たるを知らしめ、それによつて真実道を見出さねば生きられない、念仏道を得なければ生きられないということが知られるならば、五濁悪世も又結構である。苦悩も亦有難いではないか。

「人は死ぬる」これは医師が一番よく知っている。それなら医者皆宗教を求めるか、哲人であるか。ほとんどが求めないのは「人は死ぬる」であつて、「我は死ぬる」でないからである。生を見ず死を見ず、生れもしない死にもしない、我の真相から目をそらし、人生そのものから逃避しているのである。世の常識者流は、宗教を以て人生からの逃避という。然るに宗教よりは言わば、死を考えず宗教を求めない人を、自己および人生からの逃避者という。

死ぬるのは私一人である。

必墮無間の悪人は私一人である。

永劫流転するのは私一人である。

随つて弥陀の大悲は私一人がためである。

死は一呼吸の前にある。噫、死。死の前に何の問題があるであろうか。死の前に何が一体価値を持つであろうか。死の前に光るものは何であるか、死の前に亡ぼざるものは何であるか。

命がけの精進が聞法がここからはじまる。南無阿弥陀仏は、死の前に輝くたった一つの光である。死の前に何等の力も安らぎもない私に、安らぎと力を与えて下さる唯一の力である。

「青年よ、君の生活に休止符を打て、而して方向転換を行へ」

懸命になつて正法を聞け、必ず正法は眠れる我をよびさまして、久遠のみ親の招換を聞かしめ、徹底的な方向転換を与えて下さるであらう。その時、生・死する有限相対なる我は、そのまま南無阿弥陀仏に摂取せられて不滅の領域に呼吸せしめられ、金剛不壊の本願の深信に生かされるであらう。

かくて我々は大地にひれ伏して念仏申させて頂く。そのみが私に与えられた、たった一つの道である。

滔々たる濁流の中に、眼を外に奪はれて今日を浮かれ歩き、名利貪欲のみに自己を失つて真実教を聞かず、或はおしよせる苦悩にただ押流されて愚痴に終れば、人生は終に無意味におわるであらう。

龍樹和讃にいわく

「不退のくらすみやかに、えんとおもわんひとはみな

恭敬の心に執持して 弥陀の名称すべし」と。

頭を大地に下げて念仏申せ。その時、汝は一切群生の代表者として、その荷負する苦悩は歴史的意義において汝を生かすであらう。頭を下げるとは、我本来の相を知ることを、無有出離之縁の具体相、無限なる随順の象徴、頭が下らねば一切は遂に観念におわるであらう。